

## 外大での 17 年間をふり返って

玉井 健

17 年に亘る外大での教員生活が「何とか」終わりました。たとえ十数年であつたとしても自身の越し方、その時々 の 在りようをふり返って文にしておくこと、ましてそれを活字にして頂ける機会など今後ありそうもないので、厚かましさを懸念しつつ紙幅を限ってさせて頂くことにします。

僕は reflection (ふり返り) という珍しくもない手段を使いながら教員研修・授業研究をやってきましたが、さて自身の 17 年はどうだったのかと問われるとまず口を突いて出るのは「何とか」です。どうも「何とか〜」という表現が自分と外大での教員生活との関りを一番うまく言い当てているように思えるのです。であれば僕にとっての「何とか」は何であつたのか。

動詞は主体がこの世界とどのように関わろうとしているかを表す言葉であると勝手に定義するならば、「何とか」は主語である僕自身が生きる場としての外大という教育・研究環境においてそのように関係を結んできたということになります。

「何とか」は結果を見ると何ともならなかった場合と何とかなった場合に分けられるのですが、僕の場合は達成された結果はおそらく成功/失敗の分水嶺に近い処にあつて、なつた場合にも余裕は無く、またそれ以上にならなかつた場合を多く経験したということになるでしょう。僕の場合の「何とか」はむしろその過程で何とかしようと、今ココ的にもがいている様を言うというのが一番ピッタリするように思います。この余裕の無さはどこから来るのかというと、研究についての基礎を十分に身につけることなく外大に来てしまったことが主因としてあるように思います。ということで何かと不十分な僕と研究という営みとの「何とか」的關係について時を遡ってみます。

そもそも僕は外大の同僚の多くがそうであつたように早い段階で研究者を目指していたわけではありません。大学を出て最初の 3 年は商業高校でやんちゃな高校生の生活指導に追われ、転職を考えた末に留まることを決めて普通科高校でさらに 12 年教え(られ?) ました。英語教育の場に身を置きながら学問的基礎のなさを痛感して大学院に行こうと思うのですが、家族はあ

りつつ金もなければチャンスもない。姉妹都市交換教師に応募して何とか合格し、日本語教師をしながら裏番組的に大学院に行くという個人的隠れミッションを持ってアメリカに行った時、僕はすでに 36 歳でした。

幸運だったのは進学したバーモント州の大学院 (School for International Training) が一定の教育理念 (ジョン・デューイに代表される経験主義学習) に基づいて外国語教育カリキュラムを作り、それをきちんと行っていたことでした (これは簡単そうで中々むずかしい)。MA を取った後さらに supervisor として学生の実習指導を行う機会に恵まれたことで、教育理念に位置づけて実践指導を行う基礎ができました。ノン・ネイティブの僕がネイティブの院生に英語授業指導を行うのは容易ではありませんでしたが、これもフーフー言いながら何とか。

その後学位論文をリスニング指導法をテーマに書いた後、外大に来ることになりました。外大に来て英語教育領域で新しく大学院プログラムを作るといことで草案作成の機会に恵まれましたが、このプロセスにはアメリカでの教育経験が生かされました。同僚との侃々諤々の議論を経て研究者養成ではなく実践者養成を明確に謳ったカリキュラムが生まれました。

一方で実践指導をもとに修士論文指導を重ねるに従って、授業実践研究領域の研究基盤の脆弱さが気になり始めました。現場の教師たちが英語指導を行う過程で出くわす様々な問題をどう捉え、記述し、説明していくのか、その手段として適切な理論的フレームがないように思われたのです。自身にとってもリフレクションを用いた授業実践研究を研究方法としてどのように位置づけるのか、あるいは新たにどのような理論と結び合わせることができるのか、逃れられないテーマとなり、斯くして研究方法の探索が始まったのです。

研究領域としての英語教育は応用言語学に包摂されており、ここでの研究方法は心理言語学的手法に拠るものが大勢を占めています。僕自身のリスニング研究もそうです。一方で、教室での授業という文脈で起こっている有象無象の現象を捉えるには、要素還元主義的アプローチではその本質が捉えられないことは明らかです。教師と学習者、文脈との関係において現れている学びにかかわる現象を因果的に説明することそのものに無理があるのです。これは必ずしも英語教育学界に留まらない問題で、研究手段としての心理学的アプローチそのものが科学的普遍性追求の名の下で必然的に抱える問題と言わねばなりません。ということで一旦英語教育という井戸を飛び出して、文化人類学やコミュニケーション学、社会心理学、果ては臨床看護学など、実践という営みを捉えるにはどのような方法があるのかを領域横断的に探し

ては検討することを始めました。学びとは、学習者とは何なのか、柄にもなく認識やら存在とかいった領域にまで足を踏み入れていったわけです。

というわけで碌な研究者的バックグラウンドを持たない自身の欠乏感と焦燥感に突き動かされて研究法探しをしてきたのがこの十年余りのことです。今もってその茫漠とした草はらの中を歩いているわけですが、多少は道筋も見え始めたように思います。「お前よくそんなのんびりとしたペースでやってきたね」と言われれば言葉に窮するしかありません。ただ僕は実践現場からスタートして、そこから問題を見出して説明の方法を探っているうちに17年が経っていたという以外に言いようがないのです。幸か不幸か、僕は国際関係学科という社会学系の学科に籍を置いていたお陰で、他領域の考え方に触発されることが多くありました。また常任委員会という場に入ってしまったために否応なく他分野の研究に触れることができましたし、普段の学会とは異なる議論の応酬が研究方法を考えるうえでとても参考になりました。

この17年、本当に何とかやってこれたのか否か正直わかりません。ただこの環境に身を置いた17年の旅路はハラハラした緊張に満ちていたことは確かです。僕の「何とか終わりました」の裏側にはそうした状況にとりあえずの終止符が打たれたことへの安堵と一抹の寂しさがあるのかもしれません。